中津市 総括会議

ハピカム

ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」。その第9弾中津市編が11月30日、同市役所などで行われた。「1次産業」「観光資源」「産業創発」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、各分科会で出されたキーワード「未来の姿」をどのように実現し、中津の活力を生み出すかについてさらに議論を深めた。その中では、それぞれの分科会で出されたキーワード「ローカルスタンダード」「わ（和・輪）」「中津はひとつ!! つながる」に込められた思いが共通しており、中津の課題の一つは連携不足であると指摘された。この課題を解決するために、合併旧市町村ごとや業種間、同世代だけにとどまっているつながりを、全市、異業種間、世代間に広げていくことが大切であるとの一致した。参加者はこの日の出会いが新しい連携のスタートとして、新しいつながりを生んでいくこと、そして魅力あふれる未来の中津を創造していくことを誓い合った。

■ウェブ　http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン　http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／中津市　中津商工会議所　中津市しもげ商工会
協賛／国立大学法人 大分大学　㈱大分銀行　㈱NTTドコモ九州支社大分支店　日本たばこ産業㈱熊本支店　中津耶馬渓観光協会

「輪」だけじゃなく行動を

地元に認知してもらう

赤坂　分科会の感想を話してください。

中原　ローカルスタンダードについてですが、1次産業の農産物について誰もが共通して言えるような産品がないと。小さな規模のもので挙げられるものはあるが、他県から大分の中津地区にはこういう物があるよね、と言える物がないんですね。一般市民の方に中津には有名な農産品がありますか、と質問してもなかなか挙げられないと思います。1次産業に携わる人にそういう共通の思いがありますが、産品が無いわけではないと思います。黒豚生産者の梶原（美由紀・1次産業分科会）さんや、手もみ茶で1位を獲った川谷（哲也・同）君もいます。地域に発信できる物はあるし、かし。地域に表現できる場がない。自分で発信していくだけの経済力はないと。その中で道の駅をうまく情報発信の場として使えればという声がありました。主要な出荷体系プラスアルファというのが小さい規模ながらあります。それを出荷したときにロット単位でさばかれてしまうので、単価のデメリットがでてしまう。しかしそれはクオリティーが落ちる物ではない。そういった物を地域にうまく還元できれば、ブランドを守れたり、新しいブランドとして認知してもらえるのではないかという声も出ました。その発端として道の駅や地域のレストランで、共通の認識を持ってブランド化できる物があれば、地域に当たり前のようにある産品として認識してもらえるようになるのではないか。そういう意味を込め、認知してもらうためのキーワードとしてローカルスタンダードを挙げさせてもらいました。

今吉　「わ」をキーワードとして出しましたが、何に付けても連携が必要ではないかという話になりました。観光だけでなく全業種が輪になっていかないと中津の発展はないんじゃないかと。合併が大きな影響を及ぼしていて、連携できていないから祭りも同じ日に開催したりとか、中津だけの地図ができないとか、合併前からまだ引きずっている問題がある。やはり「わ」をキーワードにして連携していかないとうふれていくのではという結論でした。黒田官兵衛をどう生かすかも、連携をしてみんなで考えていかないといけない。まだ下毛と中津に壁があるので、「わ」の精神でなくしていこういう話になりました。今年に入って観光客が増えてきたので、これを生かしていかないといけません。そのためには「わ」を大切にやっていきたいと思います。他の産業の方とも「わ」をつくって一緒にやっていかないといけません。観光だけでは食べられないという話になり、地域の人との協力があって今の生活が成り立っています。これから「わ」をもって中津を背負っていきたいという話になりました。

寺下　感想としては観光資源分科会と同じ結論に至ったなと。中津は自動車産業が盛んで人口も増え、年収もアップしている。市役所の方が頑張って誘致していただいたことで、中津が元気になったなと思います。外からの誘致を評価するとともに、中津のものを外に出していく取り組みを産・学・官・民が一つになってやってPRしていこうと話がまとまりました。同世代だけでなく、縦のラインもつなげていきたい。若い人の創業を支援が可能な育成塾ができたら、経験が伝えられるのではないでしょうか。中津にいい企業がいっぱいあるので、外にPRできる機会をつくっていただければ幸いと思います。

若者が動きやすい地域

赤坂　山浦先生今までのところで何かありますか。

山浦　いままでハピカムに何度か参加させてもらった中で、上の世代との関係で好きなことができないなどの意見が出ることがありましたが、今日はそういう話はありませんでした。若い方が動きやすい所なのかなという印象です。1次産業で難しい面が多いという話でしたが、山国川の上流から下流まで一つの川でつながっていて、それぞれに面白い物があり、単に多様だというだけでなく、こだわって作っていることをもっと知ってもらったらと思います。観光資源分科会では空港付の印象が強いです。中津というよりは空港付と定着してまたが、他の地域と違ってその場で揚げてくれるのが一つの売りではないでしょうか。地元では当たり前でしょうが、その揚げる1口分を観光PRなどにいろいろ使えると思います。産業創発分科会では、ダイハツが大きいので他の企業は来ようがけど、創業する人が多いと。そういう人を応援するプラットホームのような取り組みをやっていきたいという前向きな話が印象的でした。以前中原さんと懇親会でご一緒した時に食べさせてもらったのがトマトのすき焼きで、こういうものもあるんだと思っていたんですが、その後中原さんがトマトを始められたということで、そういった部分で新しいつながりが地元でも生まれてくるのかなと。地域にも根付いていきたいという話で、みなさん同士での交流がこれからできるんだろうなと思います。分科会同士でこういうつながりができるのでは、というところから話を始めていただけるといいんじゃないでしょうか。

赤坂　分科会同士のつながりというところですが、中原さんからレストランの話もでましたので、地域に対する考えも含めてお話いただけますか。

中原　地域に対する思いは、生産者であれば誰もが持っている。農産物を作って何で評価を感じるかというと消費者のリアクションです。もっと食べたいという言葉が一番支えになり、生産者が一番自分を表現し、社会的に認知してもらった瞬間になります。他の産業でも、サービスや商品を出した時が自分を表現できる瞬間。それを遠方に求めるのではなく、身近な所に求めたいと。地域の人に認められている産物、そこで自信が持てる産業が新しい担い手にとって一番やりがいがあるのではないかと。自信はつけてきにくい産業だと思ってます。背景は3Kや低所得など負のイメージが強いということ。打破するには効率を求めていかないといけない。社会的に認められるような組織づくりも必要です。その中に、今若い世代に不足している、自分を表現できる場を提供するようにして、少ない種が確実に芽吹くようにするのが私の目標なんです。確率の低い新しい種をたくさんまく活ちもあると思うんですが、農業に思いを持つ青年がいないことはないです。その少ない種をいかに確実に芽吹かせるか、そのためには、いかに本人に自分を表現できる場を提供できるかが課題。経済的な部分もケアして、アイデンティティーを持たせることが課題だと思います。

寺下　そういう意味では私どものものづくりと1次産業がつながることによって生産性向上が図れるのではと思います。今日のように同じ年代で議論することが中津の発展につながればいいですね。

携わる人間の性格違う

赤坂　業種は違ってもノウハウは生かし合えるのかなと。みなさん自体が担い手であり、自分の立場を固める一方で、後継者を育てるのは大変ではないですか。

中原　コメと麦とイチゴに加え新法人を立ち上げて、春からトマトを産に着手しましたが、これも新しい芽を定着させやすいする方法の一つです。一つに執着しすぎると、それしか受け付けない職場になります。コメ、麦は土地利用型で、労働時間をいかに短縮するか、1人でどれだけの面積をこなせるかという中で生産性を上げていきます。それに相反するのが少ない土地の中で収益を上げる土地集約型。これは明らかに携わる人間の性格が違うんです。土地利用型で能力を発揮できるタイプと集約型で能力を発揮できるタイプがあり、両方できる人材はなかなかないんですね。私も土地利用型から入りましたんで、苦手の気質ではないが、食べず嫌いは嫌だなという考えで始めましたが、新しい人が来たときに方向性の選択肢を持たせられるように2種類の方向で進めています。どちらも拡大して、最終的には若手の担い手にのれん分けの形で、独立した農業法人を持てるようにしてみたいなんです。その中で確立した組織ができれば、地域の活性化や農村を守ることにもつながる。農業が崩壊した地域は文化も衰退する傾向があり、農業を守る大きいビジョンを持たないと農村社会そのものが機能しなくなるんじゃないかと思います。

赤坂　農業・農村を守るという話がでましたが、城下町や商店街についても、今の風景を守っていくという話になると思いますが、今吉さんはどのようにやっていきたいですか。

今吉　今まで城下町活性化という思いでやってきたので、やっていきたいというより必死でしてきたという感じが大きくて、担い手だとか考えてなかったんですが、文化を大切にしない町は滅びる気がします。豊後町には自慢の通りが多くて、漆喰（しっくい）や木の建物にいるとなんとなく和むんですよね。息がしやすいというか。ややっと私の店の前の道路整備に入りかけているので、それを生かしたソフト面を民間が頑張って町を潤わせるように、その思いを伝えていかないといけないと思います。

赤坂　それぞれ農村や城下町を大切に思う気持ちが伝わってきました。市の中心部から一番遠い所にある梶原さんは「よって連携面で思うところがありますか。

梶原　私はもう2、3歩で目田になるという山国町の奥に住んでいまして、市町村合併で中津市にはなったんだですが、経済圏はどうしても目田になります。中津にどんな飲食店があるか知らないし、自分の肉を中津市内にたくさん卸していますが、自分の足で出向いて食べることができていませんね。また西部の場合の山事実で、横のつながりがあまり広がっていない。私みたいな女性でよそからお嫁にきたような人たちはなおさら地元に輪がなくて、男性は輪があるのかもしれないけど、そこに加われない現実があると思ってます。こういう会を通じて女性が前に出て、その輪が広がり、いくつもの輪が連なっていけばもっと大きな輪になるのではと感じました。

ふるさと納税をPRに

赤坂　電気自動車や他の業種と連携していくことはありますか。

寺下　未来の子どもたちにいい環境を残したいと思って取り組み、再生可能エネルギーを使った充電ステーションを開発しました。充電器だけ販売しても売れないので用途とか型モビリティーをセットにして、地域おこしのための観光周遊に使ってもらう形で貸しています。若手に自分で創業したいという人がいるので、何らかの実例をアドバイスできる機会を中津の中で持てればいいと思います。

赤坂　山浦先生、今までの論議の中でお話しできることがあればお願いします。

山浦　今寺下さんがおっしゃったことはうれしいなと思いました。僕は農村の奥の方ばかりに行くんですが、高齢の方ばかりで足がなくと。移動に困っている方がいっぱいいるんですね。小型モビリティーや開発が進んでいる自動運転と、寺下さんがやっている自然エネルギーをうまく組み合わせて、高齢者の移動手段ができるといいと思います。大分合同新聞に中津市のふるさと納税の記事が出ていて、カタログを取り入れているという話でした。最近ふるさと納税を地域のPRのために使っているところも増えています。あの制度をうまく使えたらいいなと思います。道の駅の話がありましたが、道の駅がみなさんの課題のかなりの部分を解決できるんじゃないかな。地元の物を使いたいけど、ロットがないとか生産者とつながる場がないという課題がありますが、間に道の駅が入り、そこと組めば地場の物が入るという関係ができるといいなと思います。中原さんがおっしゃった表現する場ですは、まさにそれが道の駅になるでしょう。いろんな物を売って、分野を越えた交流が生まれる、などに道の駅を使っていけると面白いのではないでしょうか。

もてなしが大きな課題

赤坂　間地（鹿夫・観光資源分科会）さんは自宅で店をしていますが、道の駅を意識していることはありますか。

間地　空揚げ屋さんは特に意識していないと思います。なぜかというと、中津の空揚げは注文されてから揚げるので、この揚げる10分間がとても大事です。2つの問題をどうつなげておもてなしをするかが中津の空揚げ屋さんの大きなテーマです。

赤坂　その10分間で間地さんが中津の観光ガイドをしていると聞いて、すごいなと思ったんですが、道の駅のPRもできるろうし、連携していろんなところが盛り上がればいいと思います。創業や後継者の話が出ましたが、中津は自営業がしやすいところでしょうか。

今吉　商店街はだんだんと店をたたんで、今は居酒屋が多いですね。祖母が中津で商売でやったりどこでもできるよと言っていましたが、姫島出身で商売している寺下さんをすごく尊敬します。私はUターンをしましたが、中津の人は井の中のかわずだなと思ったり、出る杭は打つとかいう話も聞きます。商売しやすいというわけではないけれど、その人の努力が大きくて、努力なくしては経営は成り立たないと思います。

若い農業者の育成塾を

赤坂　どこでやっても連携という話は出て、分かりやすい落としどころなんですけど、中津の場合、創業・起業した人が多く集まっているようです。それを踏まえて各アドバイザーから一言ずつお願いいたします。

佐藤（基喜・産業創発分科会）　分科会では、手を取り合って何ならと産業は就上げしないという話が出ました。どの分科会も、つながりと地元との協調を現実的に感じないとうまく機能しない、という部分の思いは一つと総括会議で分かりました。みんな思っていることは一緒なので、今日を機に、せっかく出し合った情報を現実にしていく手段、方法を探していってもらうと地域が盛り上がると思います。中津市はいろんな企業を誘致して成果も出ています。首都圏や地方の大都市とつながり、ノウハウを持っている行政ですので、市民にドンとしていた情報をつなっていくことがステップアップにつながると思います。

田畑（勝巳・観光資源分科会）　分科会は官民衛から話は始まりましたが、いきつくところは地元での連携ということです。観光業者だけでなく異業種も含めて、官民衛が放送される来年以降のつながりの育成が大切だとの印象を受けました。観光だけで見ると、大分一中津というイメージではないが、豊富な観光資源を持っていますし、合併した旧市町村が互いの良さを理解してアピールする。また、市内の道路整備も進んでいるなど好材料もいろいろあるので、次につながることを考えるいい機会になったと思いました。

栗崎（哲・1次産業分科会）　みなさんがしっかりしたいい物を作っていますが、それを表現する場所、今回道の駅の話がありましたが、中原さんのトマトを地元でどれだけの人が食べているのかなと。そういう部分で、地元に支持されることが第一だと思います。表現の場を自分たちでやっていくのは大変なので、自治体が上手にしながらできてくれればもっといいのかなと。私は福岡市西区の姪浜という所に住んでいます。近くの居酒屋では「○○農園さんのトマトのサラダ」「○○牧場の豚のとんかつ」など、地元の農家の名前を冠にしたメニューがあります。そういうことが連携の中でできてくるといいのかなと思います。また、みなさんが定期的に意見交換して熟成し、中原さんが言われたような若い農業者の育成塾をつくっていけば、ハッピーカムな未来像が見えてくると感じました。

みんな同じ方向で議論

赤坂　いままで発言されていない方にも意見を聞きたいのですが。

川谷　お茶生産者間では指導するような立場になっていますが、こういう場に来るとみなさんの意見が新鮮で、うちの商売につながるのではアンテナを張っていました。キーワードの中津はひとつ!! つながる、わ（和、輪）がイイコール、ローカルスタンダードにつながるのではないかと。販売の方が苦手な分野なので、みなさんの力を借りながら家族を養えるのではないかと思います。

古園（智大・観光資源分科会）　キーワードを見ると全てがつながっています。こういう会をすると、いろんな意見は出るんですね。ここまでは誰でもできるところだと思うんですよ。中津市として私としてし、ここからどれくらい形にできるか。今日集まったメンバーで形をつくることがゆっとスタートになるかなと思っています。この出会いを大切にして、目標を決めて来年度には形にしたいなと思ってます。ただアドバイスをよろしくお願いします。

野村（彰・産業創発分科会）　今日山国から出てきて良かったなと思ってます。分科会に分かれていましたが、最終的にはみんな同じ方向に向かって議論していたのだなと。うちも変わったどぶろくを作ろうと思って、ナンの酵母で作りましたが、お茶を何かできないかなと。誘い合えたし、トマトとしたかい、ろいろ頭をめぐっています。

のびしろが残っている

赤坂　最後に分科会代表の方にもう一言ずついただきたいと思います。

寺下　若手経営者や起業家がこうやって真剣に議論することは未来につながると思います。連携して形になって、一つの価値が生まれたらいいなと思います。

今吉　充実した時間が持ててとてもうれしく思っております。観光の方でもこれからどうしたらいいかと考えていたところで、やはり一直線、観光に向かって頑張っていくしかないなとあらためて感じました。もう合併して8年なので、「わ」を大切にして旧中津市内から山国までが壁を取り除き、「わ」を築き、広げていって素晴らしい中津になるように頑張っていきたいと思います。

中原　何度もみなさんが指摘しているように、最終的には同じ方向性に向かっていると、協調、和といった言葉で締めくくられるイメージです。そんなやりで、一番エンドユーザーの立場に近くて市民に直結する観光の部分で、黒田官兵衛というアイテムをうまく使っていただきながら、僕ら1次産業の人間が協力できるところは目一っぱい協力しますので、一発屋にならずに、中津市が社会で認知されているようなアイテムを持っていきたいなと思いました。

赤坂　山浦先生、全体の話を聞いていかがですか。

山浦　みなさんキーワードの「わ」やつながりに共感していて、これを機に新しい動きをということで、僕らうれしく思っております。つながりはどの市町村でも必要ですが、分科会の中で連携が足りなくて、ばらばらとの話もありました。そのことはマイナスにはいてマイナスですが、逆に言うとすごいのびしろがまだ残っているということです。今日初めて出会った方もいて、その中で今後どんなものが生まれてくるのか非常に楽しみです。若い方をどんどん入れていきたいという話が印象的で、そういう若い方がどんどん面白いことをできる中津になっていけばいいなと思っています。耶馬渓の方では若い移住者が増えているそうですが、移住者の方も地元にいる面白い方もそうですし、連携していけば人がいる呼ぶ動きがどんどん出てくると思います。この会が続いて、新しい方もどんどん入ってきて、5年、10年先にハピカムが出発点となって今こんなに元気になった、となるとうれしいです。どうもありがとうございました。

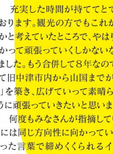
山国川見てつながろう

赤坂　今日みなさんが話し合った中で何か特に印象に残った言葉はありましたか。また、三つの分科会を通じて統一的に示せるような言葉はありますか。

山浦　キーワードとして出ていたは「わ」というのがありましたが、その中から出てくるいろんな活動が表現できる場ですとか、出会える場という意味で、「わ」と「輪」の二つがあればいいのかなと思います。

赤坂　起業とか操業をする場、そして「わ」という言葉も出ました。今日の総括会議のキーワードを「輪」と「わ」（和、輪）に決めていいですか。（一同同意）

赤坂　「わ」とか連携は確かにどんな場でも出ます。それは問題いないことなんですけど、今回の会議の前に何回か中津に来た印象として、山浦先生も言われましたが山国川は上流から下流まで一つの自治体で完結するのは、かなり珍しい特徴だと思います。その中で、例えば電気自動車であったり、農業であったり、畜産であったりいろんなことをするチャンスと場があって、それをみなさんが実際に体現されています。みなさんは山国川を見ればつながっていることと実感できるのではないかと思います。ぜひ山国川を見て連携を意識してもらえればいいなと考えています。今日はみなさんありがとうございました。ぜひ少しでも次につながるものが生まれればいいなと思っています。



総合コーディネーター
Ko Akasaka
赤坂耕
1990年入社。社会部、国東支局、竹田支局、地域報道部を経て報道部長。46歳。海あり、山あり、川ありの多様な地形。社会資本も豊い、チャンスは無限。

これまでのハピカム開催地／平成23年度 ①宇佐市（10月）②津久見市（3月）　平成24年度 ③九重町（6月）④日出町（9月）⑤国東市（12月）⑥臼杵市（3月）　平成25年度 ⑦竹田市（6月）⑧日田市（9月）⑨中津市（11月）

フルーツトマト、お茶、黒豚などの生産者が、こだわりを持ち技術の向上に取り組んでいるところから議論を始めた。キーワードは「ローカルスタンダード」になった。中津というと、とったら産品が見当たらないので、地元に目を向け、地元でほこれが誰だか前というようこと、まず地元で根付いた物にならなければということから決めた。地元で当たり前の産品となれば地域社会を守ることにもつながる。瀬の駅が今度オープンするが、中津にある素晴らしい商品をピックアップしてアピールできるチャンスになるのでは、という期待の声もあった。将来の地域の姿としては、こだわりを持った産品を作る人がたくさん育つようになれば楽しいと指摘された。また、同じ業種や品目の中では話し合う機会があるが、違う業種や産品の人とつながって連携できる場があればいいのではという意見もあった。

「1次産業」分科会まとめ

"未来の姿"
ローカルスタンダード

キーワードは「わ」。和と輪の両方の意味を兼ねている。観光地中津として、ここ数年の最大のトピックは大河ドラマ「軍師官兵衛」だが、これは一つのきっかけにしか過ぎない。かなり大きい要素ではあるが、一過性のものとならないためにはどうしたらいいかで議論が白熱した。官兵衛をその後につなげることを考えると、空揚げをはじめとしたグルメに力を入れるべき、ショッピングも大きいウエートを占めるのでは、その年にしかないものを次々と仕掛けていくことが重要、などの意見が出た。観光のコンテンツとして祭りが挙げられるが、近年担い手不足の問題を抱えており、先細りする恐れがある。それを回避するために、合併でまとまった5市町村が、1年ごとに、この年はこの地域の祭りを重点的に開催するなどできないかと提案された。中津が観光地として存在感を高めるには、5市町村がまとまる「わ」の意識が重要になるという意味でキーワードを導き出した。

「観光資源」分科会まとめ

"未来の姿"
わ（和）（輪）

キーワードは「中津はひとつ!! つながる」。産業創発というテーマを考えたとき、ダイハツのイメージが強くて新たなものがすぐに出てこない。その中で現有産業の底上げを図るため、もっと民・官・産・学のつながりを深めて情報を共有し、規模の拡大を目指せないだろうかと提案された。その事務局として市に組織をつくりまとめてもらうのはどうだろうか、人とつながることをスタートしようという意味で「つながり」とした。また、中津は福沢諭吉を輩出した場所であり、いろんな経済人も輩出している。その伝統にのっとって、創業者を育てるような場がつくれないだろうかという意見が出た。分大県立工科短期大学校があり、ITに強い人材がいる。周防灘のラインと旧都部の横のラインでシリコンバレーのような場所ができないだろうか。大学生を巻き込むことで、新たな展開ができないだろうかという意見も出された。

「産業創発」分科会まとめ

"未来の姿"
中津はひとつ!! つながる

地域に表現できる場つくる

総合アドバイザー
Yoichi Yamaura
山浦陽一 さん
大分大学経済学部地域システム学科教授。54歳。専門は農業経済学。農村の活性化に関するゼミを主催し、フィールドワークを中心に県内各地の地域づくりに関わっている。

1次産業／若手リーダー
Ryosuke Nakahara
中原良祐 さん
中津市三光、37歳。大分和郷代表取締役。農業倉大学校を卒業し、トマト生産に取り組む。地域貢献の担い手を通やし、消費者に安心安全を届けたい。

産業創発／若手リーダー
Mitsuru Terashita
寺下満 さん
中津市、41歳。T・プラン代表取締役社長。屋宇官連携で電気自動車普及の研究を開始し、2012年に自社開発の「青空コンセント」を発売。

観光資源／若手リーダー
Mayumi Imayoshi
今吉真由美 さん
中津市、41歳。朱鷺代表取締役社長。歯茎や頭皮を守る「フィルム」を開発し、2007年に朱鷺を設立。美味既「創朱華を開業。夢は城下町中津の再生。

軍師・黒田官兵衛ゆかりの地 大分県「中津市」

中津城周辺の施設を充実！ご来場お待ちしております！

中津の名産品や黒田官兵衛関連土産品など豊富な品ぞろえ！

中津土産 いろいろ 黒田官兵衛 みやげ館 営業中！

■営業時間／9:30～16:30

2014年1月19日(日)オープン

豊前国の官兵衛を知る

黒田官兵衛資料館

※資料館内イメージ画

映像やパネルで豊前国統治時を中心とした黒田官兵衛の活躍を紹介。九州中津の地で天下取りを夢見た官兵衛とは…

■入場料／無料　■開館時間／9:00～17:00

中津耶馬溪観光協会　〒871-0058 大分県中津市豊田町8-8　TEL.0979-64-6565　FAX.0979-64-6611　http://www.nakatsuyaba.com/

大分を学ぶ

中津市編　福澤諭吉

信念を貫き日本を先導
今に通じる諭吉の思想

福澤諭吉は藩の命令で教師になりました。「これが今では有名な慶應義塾の始まりです。

また、著述家としても広く活躍。中でも有名な学問のすゝめは、17編で340万部発行されたと言われています。書き出しの「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」という言葉がアメリカの独立宣言から引用されていることからも分かるように、封建的な身分制度を支える儒教思想を批判し、実証的な新しい学問の大切さを説いた内容とされています。今では当たり前の男女平等社会をいち早く紹介したのも諭吉です。

蘭学者でありながら、教育者でもあり、また著述家とも言える著名な人物として知られているのですが、ガイドさんからは「若い頃からお酒が好きで、一度止めようとしたものの息抜きはどこか必要ということで煙草を吸い始め、結局お酒もやめられないというエピソードや、息子の留学中に4年間で300通もの手紙を送るというとても心配性な親らしい一面もあります」という話もあり、私たちと変わらない活動を送っていたのだなということが知りました。

諭吉は「家庭環境に恵まれていたわけでもなく、天性の才能があったわけでもありません。ただ、信念のもとに勉学に励み、間違っていると思うことに対しては自分の主張を貫く、という強固な意志をもっていました。今の近代化、民主主義の日本を先導した福澤諭吉に敬意を表するとともに、私たち大学生は信念をもち勉学に励み自らの意で行動していくことが重要であると実感しました。

国立大学法人
大分大学
OITA UNIVERSITY

□臼野原キャンパス　〒870-1192 大分市大字臼野原700番地
□挟間キャンパス　〒879-5593 由布市挟間町医大ヶ丘17丁目1番地
□王子キャンパス　〒870-0819 大分市王子新町1番1号

[取材]
3年
有田晋梧
梅野友貴奈
氏田蓮